



エコクリティシズム研究学会

事務局便り No. 8 June 20, 2016

<http://www.ses-japan.org/>

オバマ大統領の広島訪問

—戦後 70 年と 71 年の軌跡

エコクリティシズム研究学会代表・伊藤詔子

2016年5月27日、バラク・オバマ・アメリカ大統領の広島訪問と原爆戦没者慰霊碑献花は、日本の戦後71年の歴史の中で、否、世界の歴史の中で、記念すべき出来事として人々の記憶に刻まれる瞬間となった。この瞬間が、声明で発せられた核兵器廃絶時代の始まりになることは、世界の人々の、また今や英語となって頻用される「hibakusha」の、切なる悲願であることは言うまでもない。秒単位で緻密に準備された訪問行事には、いくつか人間の予想や計画を超える時間の流れもあった。大統領との出会いに感極まって体が傾いた森重昭氏(被爆者で、アメリカ兵の被爆の歴史研究者)¹を、オバマ大統領が抱き止めたハグの瞬間である。この瞬間を報じる多くのメディアの写真は、森氏の背中に置かれた大統領の大きな手の神聖なまでにそろえた長い指と、目を閉じた両氏の顔の90度の交錯が、何びとも予期しえぬ美しい瞬間を生み出した。28日の日本の新聞各紙は一面全面で「オバマ大統領広島訪問」のバナーを打ち、オバマ大統領が原爆ドームを背に「核なき世界追及」の声明を発する写真と文言で埋め尽くされたが、読売新聞が、一面左上に大統領の森重昭氏ハグの写真を配していたのが印象的であった。同日の米メディアのうち、『ニューヨーク・タイムズ』は“In Hiroshima, Summoning Better Angels”の見出しで一面を慰霊碑の前の花輪、オバマと安倍首相の写真で覆い、大統領声明の解説を掲載した。そして『ウォールストリート・ジャーナル』は一面中央を、“Visiting Hiroshima, Obama Offers Regret but no Apology”の見出しで、このハグの瞬間の写真で飾った。しかし来日前に広島訪問批判記事の出た『ボストン・グローブス』では、オバマ広島ニュースは一面左端の細長い記事扱いで、見出しは“A World without Nuclear Weapons”(プラハ演説と重なる)であった。しかし実際には今回のオバマ大統領の声明は、プラハを超えたものがあつた。

地元メディア中国新聞は、27日夜直ちに号外を出し17時40分のオバマ献花のシーンを一面に、大統領の広島訪問までの「核をめぐる主要年表」を見開き2頁、3頁にカラーで展開し、1939年ナチス・ドイツのポーランド侵攻、41年の日本軍のパール・ハーバー攻撃、42年のマンハッタン計画から2つの原爆投下、79年スリーマイル島原発事故、86年チェルノブイリ事故、2009年大統領のプラハ演説、2011年福島第1原発事故、今年4月のケリー国務長官の慰霊碑献花、そして2016年5月27日までを辿っている。2頁には、リトルボーイとファットマンを背にしたトルーマンとスティムソンのコラージュ写真、ヤルタ会談の連合国首脳の写真、「フランク報告」のフランクとアインシュタインの写真などを掲載した。中でも8月6日、9日のテニアン島B29出撃から投下に至る分刻みの時刻表と爆撃機の航路、リトルボーイのウラン型爆弾と、ファットマンのプルトニウム型爆弾の比較図示が、目を引いた。そして3頁左下には、「事前通告なしの原爆投下に異論を唱えたバード海軍次官のメモ」のコピーを、「米国家安全保障公文書館提供」で掲載した。この文書は、原爆投下についてトルーマン政権で設置された暫定委員会のメンバーの

1人、当時の海軍次官ラルフ・バードが残したものだ

(<http://www.atomicarchive.com/Docs/ManhattanProject/Bardmemo.shtml>)。45年5月31日及び6月1日の委員会で、日本に対する「事前の警告なしの原爆の使用」を決定した際、「人道主義国家アメリカが原爆を事前警告なしに日本に対して使用するのにはふさわしくない」とする意見書を1945年6月27日「S-1爆弾に関するメモランダム」と題し陸軍長官スティムソン委員長にあてたのである。S-1は原爆の暗号名であった。中国新聞の文書掲載の意図は、オバマの訪問決断に、米国のバード文書に窺える思想の流れを指し示すためであろうか。こうした原爆観の対立は、1995年のスミソニアン博物館での「エノラ・ゲイ展論争」にも典型的にうかがえるように、20世紀のアメリカを二分してきたが、大統領の広島訪問はこの流れを変える契機になる力を持っている。

この日オバマ大統領一行は大統領専用機 Air Force I で中部国際空港から岩国空軍基地へ飛び、そこから17時過ぎ広島西飛行場ヘリポートに降り立ち、大統領のものものしい長い車列は広島平和記念公園に向かった。一行の挙手一投足は「実況中継」で報道され日本中と世界のメディアが固唾をのんで注目した。訪問が決まった直後から今日まで各メディアは特集を組んで臨み、その動きは現在も止むことなく続いている。1945年8月6日/9日についてのあまたの記録、証言、文学、批評があるように、2016年5月27日は、その歴史と意義、映像、関連の証言とともに今後長く語り継がれていくであろう。ヘリポートから平和記念公園までの道は、15分程度のはずであったが、車列はヘリポートから2号線に入る観音町交差点に向かうことなく、警備のためか最初の交差点から広島高速3号線に向かったためもう5分程度かかり、報道陣を慌てさせて17時25分平和記念公園に到着した。ついにオバマ大統領は17時48分、29万余(広島市の発表によると、現在慰霊碑内に納められている「原爆死没者名簿」には2015年8月現在29万7,684名となっている)が眠る原爆戦没者慰霊碑前に立ったのである。

新聞各紙及びホワイトハウスがリリースしたオバマ声明の最初の2つの文章は以下である。

Seventy-one years ago, on a bright, cloudless morning, death fell from the sky and the world was changed. A flash of light and a wall of fire destroyed a city and demonstrated that mankind possessed the means to destroy itself.

ここには、アメリカで広く読まれているジョン・ハーシーの *Hiroshima* の書き出し“A Noiseless Flash”のエコーも聞こえるだろう。1441語から成る声明の最後の一節は以下のように締めくくられた。

Why do we come to this place, to Hiroshima? We come to ponder a terrible force unleashed in a not so distant past. We come to mourn the dead, including over 100,000 in Japanese men, women and children; thousands of Koreans; a dozen Americans held prisoner. Their souls speak to us. They ask us to look inward, to take stock of who we are and what we might become.

The world was forever changed here. But today, the children of this city will go through their day in peace. What a precious thing that is. It is worth protecting, and then extending to every child. That is the future we can choose—a future in which Hiroshima and Nagasaki are known not as the dawn of atomic warfare, but as the start of our own moral awakening.

この声明文の歴史的評価はこれからであろうが、特に下線部に、広島という場所の感覚、死者の魂の声に耳傾ける姿勢が語られ、広島という場所の感覚が促す「道徳的目覚め」への言及に深い感慨を覚えた。かつてホロコーストが繰り返された相生橋と中島町のこの場所は、人々の参拝と祈りによって日々平和のメッカとしての場所性を獲得しているのである。もちろん場所には政治的要素、歴史、倫理、地理、想像力、そして自然の力が、混然一体となって作動する。

続いて広く報道されたように、原爆資料館と子どもたちへの「お土産」として、大統領自らが折った二対の折鶴が大きな話題となった。平和公園の折鶴には、長い祈りの物語があり、大統領が少なくともその物語を共有したいとする気持ちの、何よりの表明であったからだ。原爆資料館ではオバマ大統領訪名録の

文言「私たちは戦争の苦しみを経験しました。共に、平和を広め核兵器のない世界を追求する勇気を持ちましょう」とともに、6月9日より原爆の日以降まで原爆資料館入口のガラスケースで公開している。右は**広島平和都市記念碑**(出典：ウィキペディア「原爆死没者慰霊碑」2016年6月5日)



この歴史的訪問は、実は戦後70年2015年中の、世界の動きの結果にもよるものである。2015年に向けて英語で書かれた核批評にも、明らかに20世紀までの論調とはトーンの違いが生じ、3.11以降特に、ヒロシマ/ナガサキへの言及が増えてきた²。国内でも「被爆70年目」の真実といった形で行われた多くの被爆体験を語る記憶の書、写真集、歌集、又随筆として森瀧市郎『核と人類は共存できない』(七つ森書館)などの出版が相次いだ。中でも奥付に八月六日、九日を記す『決定版広島原爆写真集』『長崎原爆写真集』(いずれも勉誠出版)や、『被爆樹巡礼』(実業之日本社)など70年前の視覚的証言と自然回復の無言の証言も目を惹いた。自然の再生周期には7の数字があると聞かすが、批評界でも、戦後レジームの解体を目指す研究が引きも切らず出版された。一例をあげると、直野章子の労作『原爆体験と戦後日本』(岩波書店)、主要書評誌が絶賛した岡村幸宜『〈原爆の図〉全国巡回』(新宿書房)、多くの原爆小説と沖縄小説を論じる村上陽子『出来事の残響——原爆文学と沖縄文学』(インパクト出版会)、木村 朗、高橋博子編『核時代の神話と虚像——原子力の平和利用と軍事利用をめぐる戦後史』(創元社)、高齢化する被爆者に焦点を当てた奥田博子『被爆者はなぜ待てないか：核 / 原子力の戦後史』(慶應義塾大学出版会)、さらには原爆投下について米歴史家と日本の教育者の討論の記録『日本人の原爆投下論はこのままでよいか』(日新報道)等々である。その他柴田優呼『“ヒロシマ・ナガサキ”被爆神話を解体する——隠蔽されてきた日米共犯関係の原点』(作品社)は、国際的に活躍する論客の核批評であり、「投下」という日本語に内在する意味も掘り下げられている³。成田龍一の総括によると戦後レジームが解体され、「記憶の時代に入った原爆体験を歴史化するための営みが開始された」⁴のであった。このように71年目に実現したアメリカ大統領の被爆地訪問は、これまでの70年の歴史を、生きる記憶として新たな生に繋ごうとする、とりわけ戦後70年の世界の動きの延長線上に起こった出来事でもあった。*

注

- 1 森重昭『原爆で死んだ米兵秘史』2008、光人社などがある。
- 2 伊藤詔子「核文学における Atomic Ghost——小田 実『HIROSHIMA』、ロスアラモス、トリニティの文学」(*AALA Journal* 21, 2015:33-48)を参照されたい。
- 3 伊藤詔子「柴田優呼 『“ヒロシマ・ナガサキ”被爆神話を解体する——隠蔽されてきた日米共犯関係の原点』」(*『原爆文学研究』* 15「戦後70年書評特集」2016)を参照されたい。
- 4 成田龍一「証言の力学——「原爆文学」の1970年代」(*『原爆文学研究』* 14: 283)。

* 本稿は拙論「オバマ大統領広島訪問まで」(印刷中)の一部である。

~~~~~

## SES-J/MESA 合同大会(2016)レジメ特集

(合同大会プログラムは7月上旬、ジャーナルとともに郵送します)

レジメ(発表要旨)

2016年8月6日(土) 9:40—12:30

### 1. 「Irish Americansの歌におけるHeavenの表象——追放された国からヘヴンへの道」

夏目康子(青山学院大学・非)

19世紀から20世紀初頭にアメリカで出版されたアイリッシュ・ソングに描かれたアイルランド像を検討すると、19世紀と20世紀の歌におけるアイルランド像には隔たりがある。19世紀の歌は、追放された、

または見限った故国の惨状を歌ったものが多かったが、20世紀の歌ではアイルランドは天使が住む天国のような理想化された姿として描かれており、貧しいアイリッシュ移民が豊かなアメリカ人となっていった変化と呼応している。

## 2. “Environment, Utopia, and Dystopia in Le Guin’s *The Dispossessed*”

デビッド・ファーネル（福岡大学）

One of the most highly respected living American writers, Ursula Le Guin (born 1927) has written a wide variety of books across genres, her fiction and essays focusing on feminism, anarchy, and environmentalism. Her 1974 novel *The Dispossessed: An Ambiguous Utopia* is a classic work of science fiction and of utopian literature. A study in contrasts, the novel is set on two worlds, the fertile planet Urras and its arid moon Anarres. This presentation will explore the way the environments of these worlds affect and are affected by the humans who inhabit them.

## 3. 「黒い「地下」の欲望——アフリカン・アメリカン文学の創造的エネルギー」

清水菜穂（宮城学院女子大学・非）

文学批評家 Houston A. Baker, Jr.は、1984年の著作の中で、Richard Wrightを「宇宙の巨大エネルギーの塊」と「黒い穴＝地下」を意味する“Black (W)hole”という比喻で、彼のブルース的エネルギーを高く評価した。一方、Wrightを全く理解していないとJames Baldwinを強く非難した。本発表ではBaldwinもまたブルースの巨大なエネルギーを表現していることを検証し、“Black (W)hole”における創造力について考察する。

## 4. “Environmental Imaginaries in Motion: Towards an Ecocritical Approach to Translation”

カトウ・ダニエラ（京都工芸繊維大学）

Translation is the transnational practice par excellence, embodying intercultural exchange that is vital to what has been one of the key concerns of ecocriticism: the interpenetration of the local and the global. Through translation literary works are set in motion and become part of additional cultures, by allowing such cultures to re-focus the images of the works in their own times and locations, in complex ways that mediate their distinct values and representations, including those pertaining to the ways in which they cast their relationships to the environment. I will explore these issues through a brief analysis of one of the first English versions of *Hôjôki* (Notes from A Ten Foot Square Hut, 1212), the 1905/1907 collaborative translation between the British Japanologist F. V. Dickins and the maverick Japanese biologist and folklorist Minakata Kumagusu.

**シンポジウム** 13時20分—15時20分

「クロス・エスニックの文学とエコクリティシズム」

司会 西垣内磨留美（長野県看護大学）

初の試みであるエコクリティシズム研究会と多民族研究会の合同大会の趣旨に即した企画である。エコクリティシズム研究や多民族研究の視座から、各講師の専攻する作品（群）を手掛かりに、「クロス・エスニックの文学とエコクリティシズム」を探究する機会となる。各研究者の興味や研究成果がまさにクロスする場として、合同大会の意義が見出せるシンポジウムになることを期待している。

「ケン・サロ＝ウィワと多民族国家ナイジェリア」

講師 平尾吉直（首都大学東京・非）

ケン・サロ＝ウィワは、ナイジェリア東部の少数民族オゴニ人出身の作家である。1990年、シェル石油会社とナイジェリア政府によるオゴニランドの資源搾取と環境汚染に抗議するため、オゴニ民

族生存運動 (MOSOP) を創設し、精力的な活動を行っていたが、1995 年、サニ・アバチャ軍事政権のもとで処刑された。背景には、多民族国家ナイジェリアにおいて、二重三重に搾取されてきたマイノリティの歴史がある。

#### 「L. M. シルコーの *Almanac of the Dead* における汎部族的ニュークリア・アクティヴィズム」

講師 松永京子 (神戸市外国語大学)

現代のディストピア的風景を描いた *Almanac of the Dead* (1991) は、グローバルな資本主義や植民地主義に対抗する力として、人種、民族、部族を超えたアクティヴィズムを提示しており、1990年代に活発化した環境正義運動を先見的に映し出した作品といえる。本発表では特に、北米先住民やアフリカ黒人が影響を受けてきたウラン鉱山開発による環境破壊や汚染といった環境的不公正の問題に注目し、*Almanac of the Dead* における汎部族的ニュークリア・アクティヴィズムの可能性を探る。

#### 「オーストラリア文学にみる核の表象とエコ・コスモポリタニズム」

講師 一谷智子 (西南学院大学)

Ursula Heise は、Ulrich Beck の世界リスク社会論を援用することで、異人種、異文化間の連帯を促し、核の脅威や環境破壊などのグローバルなリスクに向き合うための思想としての「エコ・コスモポリタニズム」を提唱した。本発表では、先住民アボリジニの文化に深い関心を寄せ、1950年代のイギリスによる核実験と現在も続くウラン採掘が、その土地の部族社会に与えた被害を写真と文学作品に表したセルビア系移民作家 B.Wongar の核をめぐる連作と、先住民の視点からマラリングでの核実験を描いた Trevor Jamieson の戯曲 *Ngapartji Ngapartji* を中心に取り上げ、核問題を表象したオーストラリア文学に見出されるエコ・コスモポリタニズムについて考察する。

#### 「赤と緑が交叉するところ——カリブの作家にとっての歴史と風景の問題について」

講師 梶原克教 (愛知県立大学)

J. Bate はかつて 1980 年代のマルクス主義的読解と 1990 年代のエコロジカルな読解を対比させ、「今や赤よりむしろ緑の手に、革命の松明が燃える可能性を考えるべき」といつていた。いっぽうで彼の「緑」の批評は、「場所の感覚」に依拠することで観念的な理想郷のアレゴリーを通じて歴史を捨象する傾向も示していた。本発表では、植民地主義の歴史の中心舞台であるカリブで、理想化不能な風景を前にした作家たちが歴史と風景・自然の関係をどのように考察し、「赤」と「緑」を交わらせてきたかについて考察したい。

#### 特別講演 15 時 40 分—17 時 20 分

#### “Ecocriticism and the Psychology of Information Processing: Taking a Seat at the Table”

Professor Scott Slovic (University of Idaho)

~~~~~  
Co-organized by JSPS KAKENHI Grant Number 15H03189, “Transatlantic Ecology: The Interaction and Transformation of Environmental Literatures”
~~~~~

#### Abstract of the lecture:

Professor Slovic's lecture will build upon themes addressed in his 2015 book, *Numbers and Nerves: Information, Emotion, and Meaning in a World of Data*, which brings together the psychology of information processing as revealed in recent research by his father, Paul Slovic, as well as the efforts ecocritics, environmental writers, and artists make to convey information about important

subjects—ranging from genocide to contamination to global warming—in emotionally meaningful ways. He will talk about psychic numbing, pseudoinefficacy, the prominence effect, the asymmetry of trust, the anesthesia of destruction, the trans-scalar imaginary, and the idea of approaching disturbing environmental and social materials “indirectly” in the university classroom as a way of drawing students’ attention without pushing them away from difficult subjects. The psychology of information processing—how we receive, comprehend, and communicate information about the world—greatly expands the reach and social impact of ecocriticism. It is no longer simply an academic exercise, a way of analyzing artistic texts for a small readership of fellow scholars. When we begin to think of ecocriticism as a form of textual analysis that considers communication strategies, reception processes, and social significance related to the world’s most pressing issues, it becomes clear that what humanities scholars do is highly relevant to the kinds of subjects that occupy the headlines of major news media. This presentation will give a basic introduction to ecocriticism, the psychology of information processing (especially in relation to *Numbers and Nerves*), and the emerging field of cognitive narratology, and Professor Slovic will also give examples of how he applies this new work to his study of environmental literature, his college teaching, and his writing of op-ed articles for *The New York Times* and other public forums. He hopes that this new direction in ecocriticism will give scholars in the field “a seat at the table” when serious social and environmental problems are being discussed, so that our perspectives on language and social values can be included in these conversations.

## Scott Slovic & Paul Slovic

### *Numbers and Nerves: Information, Emotion, and Meaning in a World of Data*

「我々は絶えず増え続ける情報、データ、統計の海の中にいる。...その中でもジェノサイドから気候変動まで、様々な重要な社会的・環境的現象は数的記述を必要とする...」(裏表紙より)。リック・バス、アニー・ディラード、T.T.ウィリアムス、ビル・マッキベン他主要環境作家、環境思想家 19 人の寄稿による情報と情動の意味を、データの世界に探る新作。  
なお以下についてもプログラム郵送します。ご参加下さい。

2016年8月5日(金)15:00~17:00

専修大学神田キャンパス1号館104教室で講演会

Professor Scott Slovic, “The Fourth Wave of Ecocriticism:  
Materiality, Sustainability, and Applicability”



~~~~~  
2016年7月1日 エコクリティシズム研究会事務局発行

エコクリティシズム研究会 代表 伊藤 詔子

事務局 〒738-8504 広島県廿日市市佐方本町1-1 山陽女子短期大学 水野敦子研究室 mizuno@sanyo.ac.jp

〒739-0321 広島市安芸区中野6-20-1 広島国際学院大学 平瀬洋子研究室 danbara@mpd.biglob.ne.jp